

広島派遣研修を振り返って

糸魚川中学校 2年1組 伊藤 さゆり

私は、広島派遣研修に参加して、「戦争」という一言では言い表せないことをたくさん見て、聞いて、学んできました。その中で特に印象に残っていることを2つ挙げます。

1つ目は「戦艦大和の技術を平和産業にいかしたこと」です。

1941年12月に戦艦大和は完成しました。質の高い戦艦を作ろうと当時最先端の技術を駆使したそうです。戦艦大和の製造は最高軍事機密で、秘密裏に進められました。

実際に完成した戦艦大和は全長263メートル、測距儀や10キロメートル先の文字が読めた探照灯などを搭載した、まさに「最強の戦艦」でした。当時製造に携わった人々は本当に高い技術をもっていたんだ、と感動しました。

戦艦大和は沖縄に向かっている最中、アメリカ軍の攻撃を受けて沈没してしまいました。乗員3,332名のうち、戦死者3,056名と、約9割の人が戦艦大和と共に沈みました。この事実を知ったとき、とても胸が痛みました。終戦後、職を失う人が大勢いたそうです。

しかし、戦艦大和で培われた技術は終戦後に「平和産業」に転換され、呉市は物づくりのまちとして今まで発展してきました。戦争が終わったからといって戦時中の技術をなくすのではなく、別の何かに活かしていこうとする考え方は見習うべきところだと感じます。

私は大和ミュージアムを訪れてみて、「歴史を未来へ繋げていく」ということ

は、とても重要なことで、大事にしていかなければいけないと考えました。当時の人々が戦艦大和の技術を終戦後に「平和産業」に転換させて受け継いできたように、私たちも歴史を、過去の技術を「過去のもの」とするのではなく、人々の幸せを培う技術として、次に伝えていかなければいけないと思います。伝えていく方法をしっかり考えていこう、と思いました。

2つ目は「平和記念資料館」です。

平和記念資料館では、原爆が投下された直後の街並み、人々の様子、物の様子がそのままの形で展示されていました。大怪我を負いながらも子供の手を引いて必死に逃げようとする親子の絵や、黒こげになった衣類、ねじ曲がった梁の実物などは見ているだけで痛々しく、直視することができませんでした。また、原爆によって亡くなった人の最期の言葉も展示されていました。「明日もまた遊ぼう」と言って目を開かない子供、深呼吸をしてもう一度息を吸わなかった女性の様子は、戦争の壮絶さを物語っているような気がしました。

長さ3メートル、直径0.7メートルと小さな原子爆弾。そんな原爆の投下の影響は、その後生き残った人々の心と身体にも及びました。帰る家も帰りを待つ家族も無くしてしまったり、働く場所が無くなって子供に満足に食べさせられない苦痛を抱えながら自殺をしてしまったりと、泣きそうになってしまうことが78年前の広島で実際に起きていたのだと思うと切なくてたまりません。切なくなると同時に、戦争や原爆の恐ろしさを改めて感じ、恐怖で足が竦みました。

また、原爆投下にあたって、「パンプキン爆弾」と呼ばれる、原爆の形をした模擬爆弾を49発も日本に投下しました。日本各地に投下されたパンプキン爆弾は、1,600人以上の死傷者を出しました。

アメリカ軍が原爆を日本に投下した理由は「日本との戦争を終結させるため」でもあり、「ソ連にアメリカ軍の力を見せつけ、優位に立つこと」でもありまし

た。そのような理由で、一瞬で広島市民約 14 万人の命が奪われたのは、とても非道で許してはいけないと思います。

私が今回の広島派遣研修で一番心に残っているのは「原爆ドームが街中にぼつんと佇んでいること」です。周りには高層ビルが立ち並び、歩いている人やバス、電車などが行き交う、とても活気があり、賑わっている町の中にそこだけ少し浮いた様相で原爆ドームが建っているのを見て、なんだか原爆投下以前の広島の様子が垣間見えたような気がしました。原爆が投下されていなかったら、戦争が起きていなかったら、きっと原爆ドームは「広島物産陳列館」として賑わいのある場所になっていたのだらうと思うと心が苦しくなりました。

今回、改めて「戦争は二度と起こしてはいけない」、「原爆などの使用を許してはいけない」と強く思いました。日本は原爆の被害を受けた「被害者」です。しかし、様々な人を傷つけた歴史をもつ「加害者」でもあります。被害を受けたことだけを歴史として伝えるだけではなく、日本が害を与えた事実も共に伝えていかないと本当の意味で歴史を伝えたことにはならないと思います。

私が今回学んだことは、ほんの少しの事実だけで、まだまだわからないことだらけです。正しく知って正しく伝えることは、これからの私たちの役目だと思います。私は、もう一度日本が起こした「加害」と受けた「被害」について調べ、考える必要があると思いました。平和をこれからもずっと続けていくために、地球上のすべての生物にとって安心できる社会を作っていくために、まずは今回学んできたことを仲間に、家族に、みんなに伝えていこうと思います。
